

## イングランド啓蒙における理性行使の徹底化 ロック『人間知性論』からトーランド理神論へ

世話人 柏崎正憲（東京外国語大学）

報告者 青木滋之（中央大学） 武井敬亮（福岡大学）

討論者 下川潔（学習院大学）

啓蒙と呼ばれる 18 世紀西欧の知的運動が 17 世紀の先行世代に負う遺産に注目を促すために、歴史学や思想史研究において「初期啓蒙」という語が用いられてきた。その強みの一つは、従来の啓蒙思想研究においては脇に置かれてきた 17 世紀イングランドで展開した、哲学、経験科学、宗教、道徳、政治等にまたがる、知の分野横断的な刷新の流れを視野に収めうる点にある。この潮流の意義を学際的に解明することを目標として、2018 年 6 月に「イングランド啓蒙研究会」は発足し、2019 年度には科研費による共同研究をスタートさせた。本セッションは、この共同研究の一中間報告として位置づけられる。

このような学際的アプローチが浮き彫りにするであろう、イングランド啓蒙の多面性・多義性的一端を示すために、本セッションではロックとトーランドの思想史的關係に迫った。ジョン・ロック（1632-1704）が果たした啓蒙思想の源泉としての役割には、従来、多くの研究者が注目してきたが、そうした役割をいかにしてロックが担ったのかは十分に説明し尽くされたとは言えない。この問題を解くうえで格好の一テキストとして、ジョン・トーランド（1670-1722）の『秘儀なきキリスト教』（*Christianity Not Mysterious*, 1696）を挙げることができる。同書は、ロックがみずからの哲学的道具立ての有効性と限界とを測りなおしていたまさに同じ時期に、トーランドがロック哲学の含意を理神論の方向に力強く推進したことの証左を示す点において、イングランド啓蒙研究における重要な一テキストとして位置づけることができる。

第一報告「ロックからトーランドへ——イングランドからアイルランドへの啓蒙運動の伝播」において青木は、トーランドが『秘儀なきキリスト教』において、ロックが『人間知性論』（1690 年）で展開した認識論に依拠しつつ、どのように秘儀性の否定へと至ったのかを考察した。青木によれば、トーランドはロックの用語や論拠をほぼそのままの形で踏襲したが、理性の役割や、推論の根拠の一つをなす「証言 *testimony*」の確実性といった論点について、ロックの留保を決定的に踏み越えながらそれらを拡張することにより、理神論的な教会批判へと到達したのだった。この点をふまえて青木は、トーランドの『秘儀なきキリスト教』を、イングランドからアイルランドへの啓蒙運動の伝播を跡づける重要な証拠として位置づけ、彼と同じくアイルランド出身のパークリーが、ロックの知覚表象説を観念論へと推し進めたこととの並行性を指摘したうえで、まさにそのような越境をとまなう再解釈が啓蒙の本質ではないかと示唆した。

第二報告「ロックとトーランド——理性にもとづく聖書解釈の同時代的な意味を中心に」

において武井は、1690年代の三位一体論争の文脈をふまえて、トーランドをロックと比較した。『秘儀なきキリスト教』におけるトーランドの聖書解釈は、たしかにロックの『人間知性論』第4巻第17章の認識論を援用している。しかし同時にトーランドの聖書解釈はロック自身よりもいっそう合理化されたものであり、ロック自身が『キリスト教の合理性』（1695年）で展開する議論とは多くの点で対照的である。武井は、ロックとトーランドの聖書解釈を、理性・啓示・奇蹟の意味内容に注目して比較分析することによって、両者の違いを明らかにした。そして、初期啓蒙の展開過程において、いわば（ロックの立場からすれば）意図せざる結果として合理化が図られていく一つの事例として、ロックからトーランドへの思想的な影響の在り方を示した。

両報告にたいする下川のコメントは、啓蒙思想の展開における理神論の役割、つまり理性の役割の拡張とそれに伴う宗教観の変化に注意を促すものであった。啓蒙の運動はたんなる脱キリスト教化としてはもはや描写しえないが、しかしその一方で、たとえば近年のJ. イスラエルの「急進的啓蒙」論においてはスピノザと無神論の意義が強調されるため、ロックの穏健派啓蒙と理神論の関係はきちんと検証されていない。結果として、啓蒙と理神論とロックの関係については、究明の余地がまだ大いに残されていると下川は論じた。ロックとトーランドの比較という主題についていえば、トーランドにおける啓示や奇蹟の役割縮小と、ほとんど教会を不要にしてしまうところにまで拡張させられた理性の役割とに注目することで、啓蒙における理神論の役割の解明は進むだろうと下川はつけ加えた。

聴講席からも多くの鋭い質問や啓発的なコメントが寄せられた。一つ挙げれば、有江大介氏（横浜国立大学名誉教授）から、理神論の発展のみならず、なぜ18世紀のうちに理神論が衰退していったのかも啓蒙にかんする重要な問題ではないかという指摘があった。この問題について青木は、大陸への理神論の越境との関連性を示唆し、武井は、理論としての理神論の衰退というよりも、むしろ理神論的な見地が社会的現実に着いていったと説明すべきではないかと述べた。

上記の共同研究が掲げるイングランド啓蒙への学際的アプローチは、本セッションではごく部分的に試みられたにすぎない。しかしながら本セッションは、ロックの認識論や宗教論の諸要素を著者自身が意図しなかった方面に推し進めつつも普及させていったトーランドの著作を題材として、啓蒙運動の豊かな多面性を説明可能にするような研究の方向性を示すことができたのではないかと考える。